

宗報インタビュー記事

日蓮宗月刊誌『宗報（しゅうほう）』9月号にインタビュー記事が掲載されました。全国の寺院住職に配布される冊子ですが、私自身が僧侶になるまでと、僧侶になった現在の思いを赤裸々に語っています。せっかくですので、檀信徒の皆さまにもシェアさせて頂きます。▼（長文のため掲載文を抜粋してご紹介します。以下、掲載文）

今回「登場いただくのは、副住職として地域とのより良い関係構築に力を入れる谷川寛敬師。総本山久遠寺での寮生活や、日蓮宗教師として資格取得に努めた精進の日々の思い出、さらに地域活動に尽力するようになった背景と取り組み内容などについて、幅広くお聞きしました。

「谷川上人は日蓮宗布教院の最年少卒業生であり、また、大修行堂三行成満されています。さらに、全国日蓮宗青年会実行委員長、全日本仏教青年会理事等を歴任され、現在は日蓮宗富山県布教師会会長とお寺の内外で華々しい活躍をされています。

今こそ日蓮宗教師として、さまざまな活動に携わらせていただいています。が、実は、お寺の長男として生まれながら、子どものころは、ほとんど信仰心が

ありませんでした。『お坊さんになんかなりたくない』という思いさえ持っていたのです。では何か他にやりたい事があるかという、それも無い。将来の夢もなく、勉強も嫌いで、いつも遊びほうけているような子どもでした。しかし、中学三年生になると、進路を決めなければいけないじゃないですか。あるとき、総本山身延山久遠寺の寮に入れば身延山高校の学費や生活費が免除されるという情報を知ったのが転機となりました。両親にはそれまでさんざん迷惑をかけていましたから、親孝行のつもりで入寮して、形だけでも高校を卒業してこうと考えたのです。でも、その考えは甘かったとすぐに思い知らされました。

——思い描いたような寮生活ではなかった、ということですか。

先輩後輩の上下関係は極めて厳格。毎日の修行もとても厳しい。実際、最初の約一カ月間の指導期間中に、同期の新入生が一人、また一人と退寮していく。結局、一年後には新入生の数は半分以下になっていました。それぐらい厳しい生活でした。それまでずっと規律のない生活を送っていた私にとって、これは言葉にならないほどの衝撃でした。もう、根底から叩き直された、という感じです。先輩方から毎日のように厳しい訓育を受ける中で、自分本位の「我」そのものが徹底的に破壊されましたね。でも、今から思うとそれが良かった。あの厳しい修行二道の生活があったからこそ、その後の荒行堂の修行にも耐えられたと思

います。さらに、先輩方もただ厳しいだけではなく、その根底には常に信仰心と慈愛、そして感謝の思いがありました。今、自分がこうして生きていられるのも、両親や檀信徒の皆さんのおかげ、という当たり前のことも、先輩方から教えていただきましたし、修行を続ける中で、両親の愛情の深さも改めて感じる事ができました。そうした僧侶としての基礎基本も、寮での生活の中で身につける事ができたのです。

——寮生活はどのくらい続いたのですか。

高校卒業後、身延山短期大学（現身延山大学）に進学しましたから、六年になりますね。身延山短大に入るころには、寮生の中でもかなりの古株になっていますから、生活はとても楽になるんです。でも、ただ威張っているだけの存在にはなりたくなかった。むしろ、後輩たちの模範になろうと、境内のトイレ掃除なども率先して行い、後輩、同輩からも信頼してもらえるようになり、最終的には寮長を務め、良き伝統は残しながら、過度に後輩たちに負担が掛からないよう、寮の規定を変えるなど、いろいろな改革も行いました。

身延山短大の最終年には信行道場で得度しましたが、名譽なことにこのときも道場生八十八名の総班長として、道場生をまとめる役割を担うことができました。その後は、立正大学仏教学部に編入学して、さらに宗学を学び、卒業後は一年間だけ世界から日本の文化を見てみたいと、アメリカに短期の語学留学をした上で、アジア諸国

を回りました。そして、いよいよ平成十二年、二十四歳の春に自坊へ戻りました。——真成寺に戻られてからは、副住職を務めながら、布教院や大修行堂など、修行を重ねましたね。

実は自坊に戻るまでの二年間、お経から少し離れた生活を送っていました。寮生活ではさまざまなお経を、それこそ暗記するぐらいに読み込んでいたのに、たった二年間のブランクで、ところどころ忘れてたり、飛んでしまったりして、うまく読めなくなってしまうのでした。そのことに愕然として、もっと修行しなければと、さまざまな研修機関の門を叩くことになりました。特に、最初の年（平成十二年）は、五月に靈断師会二級相伝九月は布教院、十一月は大修行堂という形で、立て続けに参加しました。

——本当にあわただしい一年でしたね。

高校・短大と厳しい寮生活を送っていましたから、その点では修行の免疫はできています。それに、檀信徒の皆さんにとっては、若かろうが何をしようが私をプロのお坊さんと呼ぶんじゃないですか。だからこそ、その裏付けとなる資格や自信が欲しかった、という事情もありました。特に、母方の祖父は大阪の街頭で辻説法を行い、多くの信者さんや、お弟子さんも得て、一からお寺を立ち上げた人でもありましたから、「自分も人を教化できる説教師になりたい」という強い

